

歴史の進展と合理性

——小林秀雄など——

中 島 甲 臣

鶏やあひる（に限らないが）の雛は孵化して最初に見た動くものを母親と思うそうである。これを「刷り込み現象」と云うそうだが、人間の思想の形成にも似たような現象が見られなくもない。「ものごころ」の付き始めに受けた印象は心の底に沈着し、当人が意識するとしないとに関係なく、意外と、その思考を左右しているかも知れない。筆者にとって小林秀雄もその一人だった。彼の流麗絢爛たる筆致、意表を突くレトリック、パラドキシカルな表現は魔力を帯びて若者を魅了する。難解であることが却って心酔の度を高める。筆者もその様な若者の一人であった。勿論異論を感じたことはないわけではなかった。理解出来ないこともあった。しかしその場合も、おそらく他の多くの若者同様、自己の不明を託つだけであつた。その時期は多く戦中、及び戦後の初期であつた。何時までも「若者」であることは出来ない。それらはやがて意識の下に眠る。筆者もまた第一の人生を終えて第二の人生を歩むようになった。（簡単に云えばややや老いた）。当然来し方行く末を思う日が多くなる。若き眠りは再び目覚める。その間、世は大変換を遂げた。小林秀雄は必ずしも振るはない。少なくとも筆者にはその様に見える。筆者も、もはや「心酔」の年ではない。誇って云うのではない。（誰にでも必ず来る）年齢的生理的なもので

ある。

心酔、異論、不明、および世の大変換も含めて、若き日の「想」と、ある程度の結着を付けたい気持ちを持つ。云わば自分史の一つである。しかし、必ずしもパーソナルなものとは思っていない、が、それは自己の判定するところではない。

主として「歴史と文学」(創元選書八三昭和十六年九月二十五日初版)所載の「事変の新らしさ」に就いて当方の賛意と疑義を述べたい。「主として」と述べたのは行論の次第では上記制限以外の氏の諸論に言及することや、又、氏以外の諸賢の言説に触れることも予見されるからである。

この論考も、他の多くの氏のそれと同様、概ね明晰流麗、しかし、一部に、極めて難解な思考を内蔵している様に思われる。先取りして云えばこの「難解な思考」の解明が本稿の主題となる。

「事変の新しさ」の末尾に、実際に執筆した時期か、雑誌(多分)に発表された時期かは不明だが(昭和十五年八月)とある。「事変」とは言うまでもなく「支那事変」を意味する。

「理解」の便のため「当時」の状況に就いて若干の注釈を付ける。支那事変は周知のように昭和十二年七月に始った。世は正に「非常時」であり、対ソ関係では昭和十三年七月に張鼓峰事件、昭和十四年五月にノモンハン武力衝突があり、又、氏が「事変の新しさ」の中で『しかも、そういう仕事(支那事変の処置)はすべて殆ど予測のつかぬ欧州大戦の影響というもののうちに行なわれている』と言及している欧州大戦は、昭和十三年九月のミュンヘン会談、昭和十四年八月の独ソ不可侵条約を経て昭和十四年九月に勃発している。云わば物情騒然たる

状況である。一方『「支那事変」の実質的戦いは「漢口攻略戦」（昭和十三年十月）で終わり、その後はときに「討伐型」作戦が実施される形で推移した。』（児島襄：日中戦争）と、ある。この事は昭和十五年当時、日本にとって、支那事変が云わば手詰まりの状態に成っていたことを意味する。（実は日本の国運そのものがそう成っていたのだが）。個人の生活の如何が国運の消長に掛かっていることは何時の世にも変わりはない（勿論平成二年でも、又どの国に於ても）。人々が当時「事変」に就いて、重い想の裡ちに、あれこれと思いを巡らしたのは蓋し当然である。「事変の新らしさ」も亦その一環である。

氏はこの論考で、「事変」が如何に「新しいもの」であるかと言うこと、新しい事態に直面したとき、古き知見は、それ自体としては如何に優れたものであっても、いかに無力であるかと言うこと、を、興味ある例で示し、『軽薄な不完全な理論をことごとく疑って、難局の構造とその骨組みを一つにした態の「理論」を把握して進むべきである、との、「警世」の言を述べている。

先にも触れたように、氏の文章は行文流露、結構はあたかも精妙な有機体を彷彿させる。そのため、思考の展開の「要点」を行文の中から「意味のある一部」として抜粋することは中々困難であり、筆者の微力のせいもあろうが引用文がどうしても長くなりがちになる。この点に就いては予め御了承を得たい。が、以下に一応試みて見る。つぎに、どの様な慣習法によるのかは知らぬが、この様な文では物故者の氏名には敬称を付けぬようである。しかし筆者は小林秀雄氏にしても後に触れる田辺元氏についてもその氏名を呼び捨てにする気になれない。

これは「自分史」である。必ずしも慣習法には従わない。しかしその度合は必ずしも一定ではない。が、一言して置く。

氏は文頭から前記の主張の然るべき理由を説いて行く。行文は明晰であり、殆ど「誤読」の余地はない。対象が支那事変であろうとなかろうとそれらに関係なく、真に「新しい事態」に直面したとき、安易に「在り合わせ、持ち合わせの理論なり方法なり」に依存しては、殆どの場合対処を誤るだろう事は想像に難くない。従って思考の一般的原則としての氏の指摘には全く賛成である。

続いて、その例として『豊太閤の朝鮮征伐^{マア}』を挙げている。

『この戦争に関する太閤の確信と云うものは驚くべきものであつて、北京占領の如きも殆ど既定の事実のよう
に彼は云っています。……太閤は、氣宇壮大な英雄であつたが、決して空想家ではなかつた……千軍万馬の
間に鍛えた実戦に関する知識は、朝鮮の役当時は恐らく間然するところのないものになつていたに相違ありませぬ。
……処が大失敗をやつた、計算は悉く食い違つた。……こういう朝鮮の役のさんざんな失敗を考えますと、
色々な原因が数えられるわけですが、何を置いてもこの戦争の計画者太閤のひどい誤算と云うものは動かし難い、
そしてこの太閤の誤算は、彼が年をとつて耄碌して来たという様な消極的な誤算ではないのである。太閤は耄碌
はしなかつた。戦争の計画そのものが彼のあり余る精力を語っているわけです。彼が計画を誤つたのは、彼の取
り組んだ事態が、全く新しい事態だつたからであります。この新しい事態に接しては、彼の豊富な知識は、何の
役にも立たなかつた。……つまり判断を誤らしたのは、彼の豊富な経験から割りだした正確な知識そのもので

あつたと云えるのであります。これは一つのパラドックスであります。』

成る程。この辺までは「事変の新しさ」の基本テーマの実例として、其の意味は先ず明白と云つても良いが、このつぎ辺から、少なくとも筆者にとって、急速に難解となる。

『このパラドックスという意味を、どうか良く御諒解願いたい……太閤の知識はまだ足らなかった。もし太閤がもっと豊富な知識を持っていたなら、彼は恐らく成功したであろう、という風に呑気な考え方をなさらぬ様に願いたい。そうではない。知識が深くかつ広かったならば、それだけいよいよ深く広く誤つたでありましょう。それがパラドックスです。……そういうパラドックスを孕んでいるものこそ、正に人間の歴史なのであります。これは悲劇です。太閤のような天才は自ら恃むところも大きかった。従つて醸された悲劇も大きかった。これが悲劇というものの定法です。悲劇は足らない人、貧しい人には決して起こりませぬ』と。

（氏は「悲劇」に就いて多くの論述で言及しているが、此処で触れている「悲劇」の意味もそれに整合しているが、それに就いては今は触れない。）

「もし太閤がもっと豊富な知識を持っていたなら、彼は恐らく成功したであろう、という風な呑気な考え方」の方が分かりよかつた若年の筆者は、頭の一隅に微かな不信を蔵しながらも、氏の魔力に呪縛され、なるほどと思つた記憶がある。しかし、考えてみれば奇妙ではないか。「新しい事態」とは過去になかつた事態である。さればこそ「新しい」のである。我々は過去の知識しか持っていない。少なくとも新しい事態にどの様に対処すれば良いかの知識は持ち合わせていない筈である。知識が深くかつ広ければ、それだけいよいよ深く広く誤る、のであれば、「新しい事態」には絶対に対処できないということになる。「曇りのない自己の鏡に、難局の正体をまざまざと映せ」

と指示されても、そんなことはなんの意味も持たぬ。しかも氏はそれを指示する。恐らく氏の真意はもっと深遠であろうが、字義通りに取ればナンセンスと云わざるをえぬ。「知識（知恵）を、努めて、深くかつ広くすればやがて見えなかった道も見えて来る」のが正道ではないのか。（この様な点に就いては後に又触れる。）

氏は再び「主題」に戻って

『……あゝ、云う風などれも理路整然たる分かりやすい東亜共同体論が幾つも現われるということは、どうも何かおかしい。論者はよほど気楽な気持ちで書いているに違いない。……古い包丁を安心して使う人達には……古い包丁で結構間に合う程度の魚の新しさしか見えていない……歴史の流れが、急湍にさしかゝり、非常な勢いで方向を変えようとしている時……机上忽ち事変の尤らしい解釈とか理論付けとかゝ出来上がるから安心だという様なことで一体どうなるのか』

と正当な疑問を呈する。特に「古い包丁を安心して使う人達には古い包丁で結構間に合う程度の魚の新しさしか見えていない」などは箴言として後世の範とするに足る。

しかし、その論述が正当であればあるほど、益々、次のような疑問が生ずる。「歴史の流れが、急湍にさしかゝって」いるとき、「机上忽ち事変の尤らしい解釈とか理論付けとかゝ出来上がる」ことも異常だが、一方、単に其の流れに身を任せるだけでもなるまい。我々は意志の自由を持っている。我々は、本来、未来に目標を定めそれに到着するために現在の措置を選択する、という合目的行動をする。これが人間の人間たる所以である。現に（と云つても、氏の執筆当時）氏は「事変の新しさ」に就いて論じているが、それは「現在の措置の選択」を示す為めであらう。単に活眼を開いて対象の新しさを直視せよ、しかして其の処理の困難さを知れ、だけでは

必要条件の提示に過ぎず、十分条件にはなっていない。十分条件でなければ文字どおり不十分である。それは「現在の措置の選択」とどの様に結びつくのか、「措置の選択」は何に拠ってなされるのか、「選択」と云う以上はやはり「考えて」為されるのではないか、ではそれは「理論」を内蔵しているのではないか、氏はそれに答えねばならぬ。

『僕は懐疑的な言を弄しているのでもなければ、理論と言うものを侮蔑しているのでもありません。』と言う。が、「理論」に就いてはこれだけで、直ちに続けて、「指導理論」に就いて次のように云う。

『今日、指導理論がない、という不平とも非難とも付かぬ声をしばしば聞きますが、一体指導理論とはどういう意味なのか。予めある理論があり、そのとおり間違いなく事を運べば、決して失敗する気遣いはない、そういう理論を言うのでありましょう。それならば、そんな理論が、今日ないことは解り切った事ではないか。あれば何も非常時ではないではないか。尋常時ではないか。……指導理論という言葉は極く新しい言葉でありまして、ご承知の様に最近の社会運動が生んだ新語の一つであります。……それは、何を置いても先ず理論を、という心理傾向である。極端に云えば……指導理論がなければ後には出鱈目があるだけだと思ひ込む、そういう心理傾向である。……まことに浅薄な考え方であり……』。

これには半ばの賛意と半ばの疑義を感じる。『指導理論がなければ、鼻もかめぬ、嚏も出来ぬと思ひ込む』愚かさは、筆者は戦後四十年飽きるほど見てきた。いわゆるイデオロギー執着症である。時代が離れているので実感は持ち得ないが、氏が「指導理論」に対して感じられた嫌悪感は、我々が見てきたそれと類似のものだったのかも知れない。

しかし、「指導理論」の来歴、それに起因する臭気を除外しそれを単に「予めある理論があり、そのとおり間違いなく事を運べば、決して失敗する気遣いはない、そういう理論」と見れば、その存否を、単に非常時、尋常時というレトリックのみで切り捨てるのには賛成できないが、その論議は今割愛する。

再び問う「現在の措置の選択」は何に拠るか。氏は云う。

『しかし、指導理論が全然ないより、たとえ不完全なものでもあった方が増してはいないか、……僕はそういう説を信じませぬ。……溺れるものは藁も掴む、と言うが、それは、何も掴まぬより、藁一本でも掴んだ方がましだという意味ですが。……藁に掴まれば、これは必ず死ぬ。何にも掴まらなければ、助からないとも限りませぬ』。

成る程。しかし、何にも掴まらなければ助かるのか、助からぬのか。又、何故、救命具を、でなく、藁を想定するのか。しかしこれは依然として「指導理論」に就いてのそれであり、「理論一般」に関する見解ではない。

ようやくにして「理論」(ロジック)に就いての考えが述べられる。氏はロジックに就いてヘゲルを引用して次の様な、一見明瞭その実まことに難解な考え、を語る。

『生きた人生の正体が即ちロジックというもの、正体なのだ、この正体を合理的に解釈するための武器としてあるいは装置としてロジックがあるのではない。そういうロジックは見掛けのロジックにすぎないのである。ヘゲルが、或る日山を眺めていて「まさにその通りだ」と感嘆したそうです。……この逸話は「凡そ合理的なものは現実的であり、凡そ現実的なものは合理的だ」というあの有名な誤解され易い言葉より、ヘゲルの思想を直截に伝えているように思われます。富士山を眺めた山部赤人も「まさにその通り」と言ったに相違ありません。

ぬ。』

これには「まさにその通りだ」と言わざるをえぬ。しかし同時にそれは思考停止をも意味しかねない。そうではない。次の例を見よと氏は言う。

『桶狭間の戦いの当時、これは信長にとってまさに非常時だった。信長には指導理論などというものは一つもなかったのである。それでは信長は出鱈目だったのか、出鱈目をやって、運よく成功したのか。……難局の難局たる所以を洞察していたのは信長一人だったのだ。籠城という様な解り易い理論に頼って抜けられるような事態ではない、彼はそう考えていたに相違ありませぬ。……桶狭間の合戦は、闇討ちではない、真つ昼間正々堂々たる突撃です。……さて、信長に理論があつたかなかつたか。僕はもうくどくど申し上げる必要は認めませぬ。彼は乗るか逸るかやつつけてみたのではない、確固たる理論があつたのであります。ただ、この理論は、例えば首尾一貫した分かりやすい形では、現われぬものであった。……曇りのない彼の鏡に、難局の正体がまざまざと映っていたのであります。彼は難局を、直かに眺めた、難局と鏡との間に、難局を解釈する尤らしい理論の如きものは一切介在させなかつた。そういうものをことごとく疑って活眼を開く勇気を、彼は持っていた。……信長の理論とは、軽薄な不完全な理論をことごとく疑って、難局の構造とその骨組みを一つにした態のものとなっていたでありましょう。彼も亦ヘーゲルの如く、難局を眺めて「まさにその通り」と言えたかも知れませぬ。ここでも絢爛莊重な文体、パラドキシカルな表現、粘着力のある説得性などが現れている。最後に「事変の本当の新鮮さを知ることとは難しい。何か在那里合わせ、持ち合わせの理論なり方法なりで、易く事変とはこういうものと解釈して安心したい、そういう心理傾向からのがれる事は容易でない。」との主題を繰

り返し我々の覚悟を喚起して終わっている。

以上若干私見を交えながら氏の論述を辿つて来たが、翻つて顧みるに「輕薄な不完全な理論をことごとく疑つてしかるべきである。」と云う氏の論述は極めて明快であるが、然らば如何に為すべきか、や、「現在の措置の選択」と云う肯定面に於ては行論の晦渋を感じざるを得ない。「藁に擱まれば必ず死ぬ」、それはよく分かった。では、何にも擱まらなければ、助かるのか、助からぬのか、と、筆者が先に設問した所以である。『何にも擱まらなければ、助からないとも限りませぬ』では、否定面で示した氏の迫力何処に在りや、と云うところであろう。勿論氏はそれに就いて語っている。ヘゲルを交えたその深遠さは確かに感知は出来るが、然し、如何にも難解である。

我々が何事かを為そうとする時、その成否は、多くの場合、こちら側の主觀的希望や意志とは關係なく対象自身の自律的構造に因る。勿論この事は対象の範疇に因りその程度は当然様々である。「機械」の取扱などはその最たるものである。対象が或る種の（必然的）法則に支配されている時は、その法則に従いながら、逆に、結果として、希望するが状況が現われて来るように、こちら側が予め一定の操作を行う。これが合目的的行為である。

意識的行為としては恐らくこれ以外は考えられないであろう。合目的的行為を行い得るためには、これ又当然ながら、対象が支配されているその「或る種の（必然的）法則」を知っていなければならぬ。實際にその様な結果を得たいときに、それを支配する法則が既知の場合もあろうし、未知の場合もあろう。既知の場合はそれを誤りなく適用すべきであり、未知の場合は當然ながらそれを既知たらしめるべく探求すべきである。このようなことは、綜じて自然科学的と考えられる分野に就いては殆ど自明である。人間關係、社会的現象更に広くは歴史的現象と

なると、話は然く簡単ではない。けれども、周知のように、それらに就いて全く「法則性」がない訳ではない。社会科学、歴史学の存在がそれを示している。一寸先は闇である、ことも事実だろうが、永い目でみれば歴史の進展は然るべくしてそうになっている、と言う感じを我々が持っていることも事実である。『予めある理論があり、そのとおり間違いなく事を運べば、決して失敗する気遣いはない、そういう理論』は自然科学的と考えられる分野に就いてさえ、現実にとどの程度存在するか、果して原理的に存在し得るものなのか、問題であろう。が、人間関係、社会的現象更に広くは歴史的現象に就いても、出来る限りそれに近づく事を試みるべきである。これが筆者の基本的態度である。

信長の件は氏の「肯定面」の主張の唯一の例示である。よって *case study* としてそれについての私見を述べる。本稿のこれ迄の経緯よりこれが多少長きに亘るのも止むを得ない。用語に躊躇いはあるが、氏のそれをその儘借用する。筆者は『信長は出鱈目をやって、運よく成功した』と考える。先の引用では省略してあったが、『信長は、長篠の戦いなどでよく解るように、実に用意周到な戦略家であった』は氏自身の言葉である。では、『長篠の戦い』に於て『信長に理論があつたか』筆者はもうくどくど申し上げる必要は認めませぬ』『確固たる理論があつたのであります。しかも、この理論（武田騎馬隊に対する防御柵の設置、足輕一万名から成る三段構えの鉄砲隊の使用）は例えば首尾一貫した分かりやすい形で、現われるもの、現わされるものであつた』。この場合は『信長も亦ヘゲルの如く、難局を眺めて「まさにその通り」とは言わなかつたでしょう。信長は本来慎重な合理主義者である。当時陣中の僧侶の吉凶の占いに従つて行動していた上杉、武田とは段違いである。猜疑心が強かつたと言われる彼の性格は上記の「慎重さ」と整合する。長篠の戦いとは異なり、桶狭間の合

戦では彼には全く成算がなかった。だから清洲城中の軍評議で『籠城など思いもよらぬと言う。何故思いもよらぬのか、それならどういう策があるか。信長はそういう事は一言も言わぬ。詰まらぬ雑談など致しまして、夜も更けた。拙者は睡いから寝ることにする。皆んなも退って休め……家老達は苦り切って「人間運の末には、知恵の鏡も曇るとはこの節なり」と落胆したと申します』と、云うことになる。当然である、彼には策がなかった。言える筈がない。又、『信長は……清洲の城を飛び出し……彼は、馬の鞍の、前輪と後輪とに、両手を掛け、横様に乗って、鼻歌を歌っていたと言う』。続いて氏は『彼には確信があったのです』と言うが、筆者はそうは思わない。彼は主家を滅ぼし弟を殺して押し上がってきた、当時小なりと雖も戦国大名の一人である。十中八九自分はこの戦いで死ぬだろう。鼻歌を歌う位は何の不思議もない。諸般の事情を勘案するに、この様に考える方が素直ではないか。人の性格は変わり得ると言えばそれまでだが、以上の様な事情を顧慮すると、桶狭間の合戦に就いての前記氏の記述はかなりの「無理」があるように思われる。

戦国統一の過程で数多くの弱小城主が圧倒的な敵に対して信長同様「籠城など思いもよらぬ」と言い「真つ昼間、正々堂々たる突撃」をして行った。彼等の総てが個人的勇気で、胆力で、識見で信長に劣っていたとは思われない。その時、彼等も、信長が桶狭間の合戦で把握していたと氏が称する「理論」を当然持ち得た筈である。しかし彼等の殆どは空しく滅んで行き、その記憶は「歴史」の闇に消え、独り桶狭間の記憶のみが残っている。「理論」は凡通性を特色とする。信長が桶狭間の合戦で把持していたと氏が称する「理論」とは何か。「理論」などはない。信長は難局を直かに眺め、決断を以て籠城を捨て、白昼堂々たる突撃を行い、幸いにして勝ったのである。見事である。その過程全体をヘゲル流に『生きた人生の正体が即ちロジックというもの、正体なの

だ』と云うならば、ヘゲルと同じく「まさにその通り」と言わざるを得ない。しかしその場合は同じく理論と云いロジックと云っても、それは、如何に為すべきか、や、「現在の措置の選択」に於ける理論やロジックとは全く異なるものである。その意味では氏は「肯定面」ではついに何事をも語っていないと断ぜざるを得ない。

勝つ可くして勝った側には多くの場合『確固たる理論があったのであります。しかも、この理論は例えば首尾一貫した分かりやすい形で、現われるもの、現わされるものである。』

これに対し辛うじて勝った側にはその様なものはない。敗けた側は云うまでもない。

何故このような「無理」を氏は行なったのか。その解明の手掛かりとして、他の一つの例を挙げる。

田辺元氏の「歴史的現実」の速記録の中にも、「事変の新しさ」からのそれと全く同質の「共感と疑義」を感じた記憶が筆者にはある。この速記録は後に岩波書店から出版され、次のような「はしがき」が付いている。「本書は昭和十四年五月十日から同年六月十四日迄の間に前後六回に亘る京都帝国大学学生課主催の日本文化講義に於て田辺元先生のなされたお話を速記し、教学局の許諾を得、先生に請うて上梓したものである。当時満堂の学生が非常に緊張と感激とを以てこの講義を傾聴した光景を今も眼前にまざまざと想い浮かべる」と（圈点筆者）。年月及び「はしがき」を付記したのは、当然ながら「事変の新しさ」との対比と時代的背景を想定している。

（筆者は昭和十七年五月三十日第六刷発行のそれを現に所持している。）

標題通り博士は「歴史的現実」に就いて語り始める。以下、殆ど at random に引用する。同書に曰く

『我々が歴史的現実に関心を持つのは、それから殆ど堪えきれない圧力を加えられており、我々自身の希望とか要求とか、その前には全く無力であり、それが我々に抵抗することの出来ない力として働いているからであります。』

『現実とは過去からいえば動けないもの、しかも未来的には動ける筈のものである、未来に対する自由を含むものである。ここに歴史的現実のもつきわめて明らかな矛盾がある。』

『道理から歴史が始まるように思うならば、それは最早歴史的現実の立場を脱しているものと云はなければならぬ。』

等々。

処がこれに全く符合するように小林氏も「歴史的現実」に就いて語っている。『いつの時代にも、その時代のも思想界を宰領し、思想界から多かれ少なかれ偶像視されている言葉があるようです。仏という言葉だった事もあるし、神という言葉だった事もある。徳川時代では天という言葉がそうだったし、フランスの十八世紀では理性という言葉がそうだった、という風なものでありますが、現代にそういう言葉を求めると、それは歴史という言葉だろうと思われます。歴史とはそもそも何物だろう、というような質問は、一ぺんもした事のない人々も歴史的現実だとか歴史の必然だとかいう言葉を、何かしら厳しい感じを持った言葉として受け取っている次第で、これはどうやら、現代に於ける鰯の頭と云ったような気味合いのものではないかと思われます。』（歴史と文学）。一見揶揄的だが真意はそうではない。氏が、「事変」の行く末に最大の関心を持ちながら、当時横行した凡百の「指導理論」に噛みついたのと同根である。だから『死なしたくない子供に死なれたからこそ、母親の心に子供の死の必然な事がこたえるのではないですか。僕らが望む自由や偶然が、打ち碎かれる処に、その処にだけ、

僕らは歴史の必然を経験するのである。僕らが抵抗するから、歴史の必然が現われる、僕らは抵抗を決してやめない、だから歴史は必然たる事を止めないのであります。これは、頭脳が編み出した因果関係という様なものは何の関係もないものであつて……』(歴史と文学)、『歴史を審判する歴史からはなれた正義とは一体なんですか。空想の生んだ鬼であります。』(文学と自分)、と例によって一部パラドキシカルではあるが、書いている。内実は前記の博士のそれと全く同じである。

さて、この、博士の云う「歴史的現実」、氏の云う「信長にとっての非常時」を如何にして突破するか。

『我々は色々計画をたててもなかなか思いどおりになるものではない。しかしどうにもならない中で飽くまで無私謙虚に精進していると却って思いもよらぬ先方から道が開けて来る事を我々は何らかの程度で経験する。これが現実の自由である。我々は歴史的現実として動かすことの出来ないものをはっきり知る時、歴史的現実として自由を感じ得る』『我々はこのどうにもならないという所を手離してはならぬ。それを忘れず捨てず、自己と現実とが隔てないものになるとき、このどうにもならない必然が却ってどうにでもなるものでありその中に自由の天地が開けて来るのである。……それは懷手をして成行きに任せるのとは正反対の絶対行為である。必然即自由である。……』と博士は述べ、この様なことは各自同様の経験から自得しているであらうが敷衍する、として禅宗の人、五祖法演、の作つた寓話を述べている。

『あるその道に長じた泥棒の親方がいたが、年を取ってきたので、息子が修行して置かねば食って行くことが出来ないことになった。そこで息子は親父に泥棒の商売を教えて貰いたいと頼んだ。すると親父は息子を連れて金持ちの家に垣根を破って忍び入り、立派な着物の入っている大きな櫃を開けてその中に息子を入らせてから、蓋

をして錠を掛け、そして自分は垣根から外に出てその家の玄関を叩いて「泥棒が入った泥棒が入った」と云って家の人を起こした。息子は騒ぐと見つかるし、と言って黙っているとそのまま餓死せねばなくなるので、実に怪しからぬ残酷な親父であると恨んだ。これは我々がどうにもならない所に陥ちた所である。そこで何も出来ずに何もしないで居ては泥棒になる資格はない。ところで息子は櫃の中で鼠が物を咬むような音をさせた。すると鼠が居ると言うので女中が手燭を持ってきて蓋を開けたので、彼は女中の燈りを消して逃げた。泥棒だと言うので家の人達が後を追うと、大きな石を井戸に放り込んで、家の人逃げられなくなって井戸に飛び込んだのかと思って、井戸の回りに集まって騒いでいる隙に逃げ帰った。そして父を詰ると、父は「それは大変結構だ、それで一人前になれた」といったという。』

筆者はこれを読んだ当時「事変の新しさ」の秀吉の悲劇や『信長の理論』から受けた違和感と同じ違和感を受けた。自己の文をそのまま再用すれば「若年の筆者は、頭の一隅に微かな不信を藏しながらも、氏の魔力に呪縛され、なるほどと思った記憶がある。」となる。この場合は、特に論者が一代の碩学である為、一層自分の不敏さを意識し不信の根を自ら消した。

この寓話と「信長の理論」の共通点は、予想される圧倒的多数の「負」の中の考えられないほど僅かの「正」の可能性を、あたかも必然であるかの如く語る思考法である。この話では息子は無事脱出する事が出来たが虚心にこの様な事態を想定すれば、寧ろ、空しく櫃の中で餓死するか捕らわれる「息子達」の方が多いだらうと感ずるのではないか。その方が、より素直な想定ではないか。何故、博士はそれを、強いて、難解且つ晦渋な「絶対行為とか必然即自由とか」で弁護しようとするのか。『飽くまで無私謙虚に精進していると却って思いもよらぬ

先方から道が開けて来る事を我々は何らかの程度で経験する。これが現実の自由である。』(圈点筆者)ことも確かであろうが、それによって「歴史的現実」の圧力を突破できるのか。他力本願である。如何にも弱々しい。これは「藁」だ。「藁に摺まれば、必ず死ぬ」。小林秀雄氏は既に述べているではないか。櫃の中の「息子達」は疑いもなく餓死するのである。司馬遼太郎氏は「坂の上の雲」を書き終えてと云う随筆で「いま後世という特権をもつてこの時代をふりかえってみれば」と謙遜の意を込めて語っているが、筆者とて同断である。それを承知してもなおかつ語らざるを得ない。

答えは簡単である。展望がなかったのである。誰にも。それを「無理」に合理化しようとするから難解かつ晦渋となる。ヘーゲルの深遠なロジックを援用する迄もない、「前提から矛盾ができれば前提は否定される」と云う、初等幾何でしばしば用いる背理法(昔は帰謬法と呼んだ)と云う「論理法則」で十分である。この場合「前提」は何か、は、極めて難しいが、地盤は既に動き始めている。小林秀雄氏は既に述べている。『歴史を審判する歴史からはなれた正義とは一体なんですか。空想の生んだ鬼であります。』『このパラドックスという意味を、どうか良く御諒解願いたい。……太閤の知識はまだ足らなかった。もし太閤がもっと豊富な知識を持っていたなら、彼は恐らく成功したであろう、という風に呑気な考え方をなさらぬ様に願いたい、そうではない。知識が深くかつ広かったならば、それだけいよいよ深く広く誤ったでありましょう。それがパラドックスです。……そういうパラドックスを孕んでいるものこそ、正に人間の歴史なのであります。これは悲劇です。太閤のような天才は自ら待むところも大きかった。従って醸された悲劇も大きかった。これが悲劇というものの定法です。悲劇は足らない人、貧しい人には決して起こりませぬ。』と。此処で、筆者は、云うまでもなく、「太閤」に、小林秀

雄氏、田辺元氏、「当時の満堂の学生」etc.を擬えている。自己の論述がその儘自己を捕縛したのである。悲劇という他はない。しかし安んぜよ。『悲劇は足らない人、貧しい人には決して起こりませぬ。』とある。この言葉は正しい。自己の言葉が最後に自己を救う。『飽くまで無私謙虚に精進していると却って思いもよらぬ先方から道が開けて来る事を我々は何らかの程度で経験する。これが現実の自由である。』ことの証左か。如何。